



甲虫ニュース

No. 104

COLEOPTERISTS' NEWS

December, 1993



本州日本海地域のヒメハナカミキリ類 —ナガバヒメハナカミキリの触角の変異を中心に—

窪木 幹夫

日本列島の低山帯からブナ帯に生息するヒメハナカミキリには、全国的に広い範囲に分布する種が多い。このような広域分布種は、それぞれの地域で優占種の一つになっているが、各地の標本を比較すると、いろいろな形質に様々な変異がみつかる。九州、四国、本州の低山帯から中山帯の落葉広葉樹林に生息するナガバヒメハナカミキリ *Pidonia signifera* (BATES) もその例である。佐渡島のナガバヒメハナは、雌雄とも上翅斑紋や中・後腿節の黒色部が発達する(窪木, 1991)。中部地方以西のナガバヒメハナの雌には触角の先端付近に淡黄白色部を持つ個体が見つかり、特に北陸地方と山梨県南部には高頻度で出現する(窪木, 1992)。

ナガバヒメハナのうち、北陸地方に分布する個体群は、雌の触角9~11節に淡黄白色部を持ち、体型が幅広く、触角の長さや交尾器の形態に関東地方のナガバヒメハナとは違いがあり、ホクリクヒメハナ *P. jasha* という独立種として記載された(S. & A. SAITO, 1989)。記載文によれば、ホクリクヒメハナは福井県、富山県と京都府、岐阜県、長野県の北部に分布する。ただし、副模式標本には、ホクリクヒメハナの特徴を顕著に示す福井県産の標本しか使用されていない。ホクリクヒメハナは山梨県の大菩薩を

含む関東地方のナガバヒメハナと比較されているので、中間地域の中南部地方日本海地域の6地点を選び、触角の各形質について比較検討した。

表1はその結果をまとめたもので、各形質は新種記載時にホクリクヒメハナとナガバヒメハナの区別点として使われた形質である。いずれの地域も雌雄それぞれ10個体以上を調べた。ただし、S. & A. SAITO (1989)の論文では、表1中の北陸地方の個体群は *P. jasha* として、関東地方の個体群は *P. signifera* として、それぞれ独立種とされている。

雌の触角9~11節の色

雌の触角先端付近が淡黄褐色の個体を含む個体群は、有峰(富山県大山町)、杉の平(新潟県糸魚川市)そして三国峠(新潟県湯沢町)であった。触角先端付近が淡黄白色の個体は、有峰では80%を超えていたが、杉の平では10%以下となった。小谷大海川や小谷松尾川(共に長野県小谷村)の雌の触角は黒色で、11節の基部付近の淡黄褐色部すらみられなかった。乙見山峠から笛ヶ峰(新潟県妙高高原町)の林道沿いのタニウツギやトチノキの花から採集されたナガバヒメハナは、すべて雌の触角が黒色の個体であった。三国山脈の三国峠では、雌の触角が淡黄白色の個体が25%含まれてい

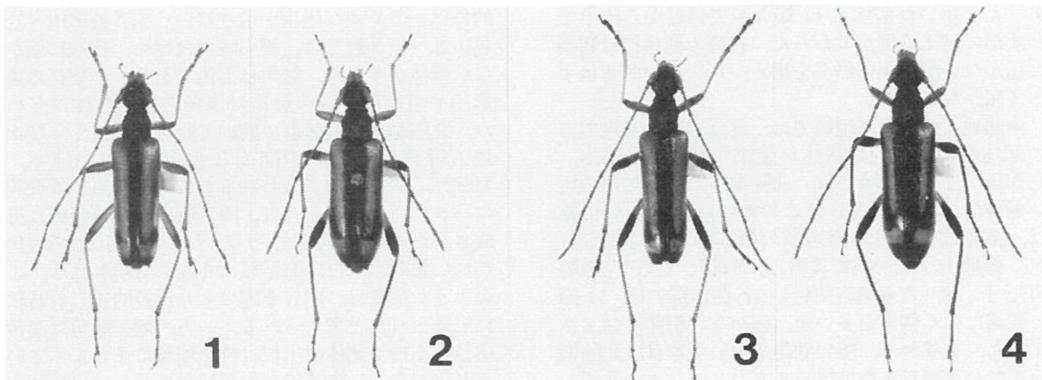


図1~4. ナガバヒメハナカミキリ *Pidonia (Pidonia) signifera* (BATES). 1, 2: 新潟県妙高高原町笛ヶ峰産, 3, 4: 新潟県湯沢町三国峠産, 1, 3: 雄; 2, 4: 雌。

表1. 中部地方日本海地域のナガバヒメハナカミキリの触角の比較。

触角の形質	個体群名							
	北陸地方 ^{a)}	有峰	杉の平	小谷松尾川	笹ヶ峰	三国峠	浅草岳	関東地方 ^{a)}
[雌]								
6節/5節(%)	70~80%	70~79%	71~77%	72~76%	69~76%	72~80%	71~79%	70~75%
翅端に届く節数 ^{b)}	11節	×時に11節	×	11節時に×	11節時に×	11節時に×	11節	10節
9~11節の色 ^{c)}	Yb	Yb	By	B	B	By	B	B
[雄]								
6節/5節(%)	70~80%	71~82%	70~82%	73~79%	73~79%	73~82%	73~79%	75~80%

a) S. & A. SAITO (1989)による。b) ×: 触角先端は翅端に届かない。

c) Yb: 淡黄白色個体の中に黒色個体が混じる個体群; By: 黒色個体の中に淡黄白色個体が混じる個体群;

B: 黒色の個体群。

た。越後山脈の浅草岳(福島県只見町)や守門岳(新潟県栃尾市)では、黒色個体ばかりであった。

メラニン顆粒の減少による雌の触角先端付近の淡黄白色化個体の割合は北陸地方からの新潟県に向かって次第に減少する傾向が確認された。早川(1991)は、雌の触角先端付近に淡黄白色部を持つ個体が長野県の雨飾山、小谷温泉に分布することを報告している。今回の調査では、小谷村一帯から笹ヶ峰にかけての妙高山塊からは黒色個体しか確認できなかった。越後山脈でも黒色であったが、中間の三国山脈の三国峠(浅貝川上流)には淡黄白色個体が生息していた。周辺の赤湯温泉(清津川上流)や吾策新道(魚野川上流)などの個体群でも淡黄白色個体が含まれていた。早川(1991)は、三国山脈の西端、長野県下高井郡山の内町十二沢から雌の触角先端付近に淡黄白色部を持つ個体を報告している。今後、三国山脈の他地域からも触角淡黄白色個体を含む個体群がみつかる可能性が高い。

雌の触角の長さ

ホクリクヒメハナの雌の触角は11節で翅端に届き、ナガバヒメハナは末端節を残し、10節で届く。これは両種の重要な区別点になっている。調査した日本海地域のナガバヒメハナの雌は、いずれも触角が短く、11節で翅端に届き、中には届かない個体もあった。届いた個体も11節の中央付近から後半でわずかに越える例が多かった。有峰の個体群は翅端に届かない個体が60%を超えて、杉の平の個体はすべて届かなかった。

中部地方の太平洋地域では、北陸地方と関東地方の個体群の中間的な個体が確認されたが(窪木、1992)。日本海地域では、北陸地方と同じ触角の短い個体であった。さらにこの雌の触角の短い現象は、東北地方の日本海地域の個体群にも認められた。飯豊山(山形県飯豊町)、赤倉沢(秋田県雄勝町)、十二湖(青森県岩崎村)の各個体群では、11節で翅端に届く個体が多いが、届かない個体も含まれていた。すなわち、雌の触角が短い現象は、北陸地方を含む本州日本海地域のナガバヒメハナに共通した特徴であることが明らかになった。

触角5節に対する6節の割合

日本海地域の個体群を比較すると、雄では、有峰と杉の平の個体群は北陸地方の数値とほぼ同じであった。小谷松尾川と笹ヶ峰のような妙高山塊、さらに三国峠と浅草岳の各個体群は関東地方と中間的な数値になった。雌では、有峰の個体群が北陸地方の数値とほぼ同じになった。杉の平、小谷松尾川、笹ヶ峰の個体群の数値はしだいに関東地方の数値に近づく傾向が認められた。さらに東に位置する三国峠や浅草岳の個体群は関東地方より北陸地方と同じ数値になった。

北陸地域の個体群の雌の触角が短く、先端付近に淡黄白色部を持つという特徴は、ともにこの地方に固有な形質ではないことが明らかになった。短い触角は本州の日本海地域に広く見られる共通した形質である。触角先端付近に淡黄白色部を持つ個体は、中部地方以西の各個体群でその出現頻度に高低はあるものの、各個体群が内蔵している形質である。中部山岳地域でも、周辺地域では黒色なのに、先端付近に淡黄白色部を持つ小さな個体群がみつかっている(窪木、未発表)。さらに、福島県南部からもこのような例が確認されている。北陸地方は、この二つの形質が重なり合って現われる地域の一つといえる。

ナガバヒメハナの短い触角と淡黄白色の触角という二つの形質が同時に発現する地域もあるが、全国的にはパラレルな出現を示さない。小谷松尾川～乙見山峠～笹ヶ峰では、雌の触角は短く、翅端に届かない個体が多いが、触角は黒色である。山梨県の櫛形山や湯之奥の雌の触角は淡黄白色の個体が多いが、北陸地方の個体群に較べて明らかに長く、関東地方の個体群との中間的な傾向を示す(窪木、1992)。同じ触角に現われるこれらの形質が地理的にパラレルでないことは、両形質が異なる時代に形成された可能性が高い。ナガバヒメハナの雌の触角が短い傾向は、日本海地域に共通して現われる。このような形質は、同じ要因により比較的新しい時代に形成されたと考えられる。一方、雌の触角に淡黄白色部を持つ個体の出現は特定地域にまとまっているわけではなく、不連続な出現傾向を示し、比較的古い時代に形成されたと考えられる。両形質のこのような出現状況からみて、色の分化がより古い時代に

起き、より新しい時代に長さの分化が起きたと考えられる。

日本海地域のヒメハナカミキリには次のような特徴を挙げることができる。

① 北陸地方以北の本州日本海地域にはミワヒメハナ *P. miwai*, クロヨコモンヒメハナ *P. hayashii*, アサマヒメハナ *P. takechii*, ハクバヒメハナ *P. pallidicolor* のような特産種や、セスジヒメハナ *P. amentata kurosawai*, シラネヒメハナ *P. obscurior hakusana* のような日本海地域特産亜種が生息する。これらの種や亜種は、中部山岳地域や本州太平洋地域に近縁な種や亜種を持つ場合が多い。

② 全国型の分布を示す種でも、太平洋地域では優占種になっているが、日本海地域では少なくなってしまう。ニセヨコモンヒメハナ *P. simillima*, チャイロヒメハナ *P. aegrota*, フタオビノミハナ *P. puziloi*, オオヒメハナ *P. grallatrix* などがその例である。ホソガタヒメハナ *P. semiobscura*, ニッコウヒメハナ *P. limbaticollis* のような分布域の狭い種でも、日本海地域では少ない。

本州日本海地域では各種ヒメハナカミキリの出現期や垂直分布域は異なるものの、①の日本海地域特産種や亜種は、それぞれの出現期や標高で優占種の一つとなっている。すなわち、日本海地域で優占種となっている種は、日本海地域の環境に対して、適応的な形態の変化をおこし、優占種になったと考えられる。一方、全国的に分布し優占種となっている種が日本海地域では劣勢になっているのは、日本海地域の環境になじめなかつたのであろう。すなわち、この量的差は日本海地域の環境への適応の程度の差と考えられる。

①の日本海地域で優占種となっているヒメハナカミキリに共通した形態の特徴は、(a) 体型の寸づまりと肢や触角の短化、(b) 触角、上翅、肢を含む全体の黒色部の縮小の二つにまとめられる。(a) の例としてクロヨコモンヒメハナを、(b) の例としてムネアカヨコモンヒメハナ *P. masakii*, アサマヒメハナを挙げることができる。上翅のみに退色する例としてセスジヒメハナを、(a) と (b) の両方が現われる例としてハクバヒメハナを挙げることができる。本州日本海地域のナガバヒメハナの触角に共通してみられる短化現象は、雌の体型が幅広くなことを考え合わせると、(a) の例と考えられる。

一般的にヒメハナカミキリの触角は、全体が黒色から、黒色と黄褐色のダンダラ模様となり、さらに黒色部が縮小し、全体が黄褐色まで変化する。同一個体群内では、雌雄同じ変化の傾向を示すが、雌の方がやや黒色部が発達する。ところが、ナガバヒメハナでは、雄の触角が黒色なのに、雌の触角だけが部分的に淡黄白色になっている。これを一般的な触角の退色と同列に扱うのは無理と思われる。ハナカミキリ亜科の中には、ニンフホソハナ *Strangaliella nymphula*, ヒゲジロホソハナ *Japanostrangalia dentatipennis*, ヒゲジロホソコバネ *Nycydalis odai* な

ど、触角の先端付近が雌のみ、または雌で強く淡黄白色を呈する種が知られている。ハナカミキリ亜科のいくつかの属に点々と見られるこの形質は遺存的な古い形質かもしれない。

日本海地域のヒメハナカミキリが太平洋地域のそれと比較して、特定の種が優占するようになった環境要因はなんであろうか。両地域の気候は冬期の雪の多少によって特徴づけられる。この日本海地域の多雪気候は、幼虫が土中や地表の倒木や立枯れの中で越冬するヒメハナカミキリに大きな影響を及ぼすと考えられる。具体的には、根雪期間と積雪深が重要な要因となると推定される。雪が消えずに地表を覆っている根雪期間の長さは、北海道で4~5カ月間、東北地方で3カ月間、同山間部で4カ月間、北陸地方で2~3カ月間、同山間部で3~4カ月に及ぶ。最深積雪は日本海地域では大きいが、東北地方南部から北陸地方の日本海地域では特に大きく、400 cm を超える。中央脊梁山脈の西側斜面ではさらに積雪は大きくなる。

土中で越冬したヒメハナカミキリ幼虫は地温の上昇により、蛹室内で蛹になり、そこで羽化し、地上にはいだす(窪木、1987)。多雪により根雪期間が長くなり、融雪期が遅れると、ヒメハナカミキリ成虫の出現期も遅れる。このような出現期の遅れは隣接地域の個体群との出現期のずれをつくりだす。たとえば、北アルプスの白馬岳では9月になつてもヒメハナカミキリ成虫の姿を見かける。妙高山では8月中旬にヤグルマソウの花に多数の成虫が群がっているのを観察している。これらの観察は、北アルプス南部の同標高地域と比較して、成虫の活動期が1カ月近くも遅れている例であろう。積雪下では普通0°C 以下に温度が低下することが少ないので、積雪は低温からの保護物として有効である。ヒメハナカミキリ幼虫は樹皮部を食べるが、終令幼虫になる前でも樹皮部が乾燥すると、乾燥を避けて土中に入ってしまう習性がある。中部地方太平洋地域の幼虫調査では、種によって耐乾燥性に差が認められる(窪木、未発表)。積雪下では湿度100%で、乾燥からも幼虫を守る効果があると考えられる。このような多雪気候による出現期の遅れ、低温や乾燥からの保護が、特定の種の生活に有利に働いたと推定される。

ナガバヒメハナの触角の変異を中心に、本州の日本海地域のヒメハナカミキリの特性について考えた。日本海地域の特定のヒメハナカミキリにみられる体型の寸づまりと肢や触角の短化(a)や黒色部の縮小(b)と多雪気候との関連を指摘した。ナガバヒメハナにみられる触角の短化現象は前者の例と考えた。この地域のヒメハナカミキリが共通した形態変化を起こす理由については別の機会に考えたい。全国型の分布をするヒメハナカミキリはいろいろな変異を持ちながら、日本列島の多様な環境の中で生活している。広域分布種が持っている様々な変異は、日本列島の地形的・気候的多様性の反映であろう。

末筆ながら、ヒメハナカミキリの調査に常々ご協

力いただいている山屋茂人、須藤弘之の両氏、また、有峰のナガヒメハナの標本を下さった北村征三郎氏、三国峠周辺のナガヒメハナの情報を下さった武智昭一氏に厚くお礼申しあげる。

参考文献

- BATES, H. W., 1884. Longicorn beetles of Japan. *J. Linn. Soc. London (Zool.)*, 18: 205-262.
 早川文広, 1990. 長野県のホクリクヒメハナカミキリについて、まつむし, (79): 22.
 崩木幹夫, 1987. 日本の昆虫⑤ヒメハナカミキリ, 171 pp

+8 pls. 文一総合出版、東京.

——— 1991. 佐渡島のヒメハナカミキリ類——セスジヒメハナカミキリを中心として——. 甲虫ニュース, (95): 5-7.

——— 1992. ナガヒメハナカミキリの触角にみられる変異について. 甲虫ニュース, (100): 20-22.
 SAITO, S. & A. SAITO, 1989. A new *Pidonia* (Coleoptera, Cerambycidae) from the Hokuriku District, Central Japan. *Elytra, Tokyo*, 17(2): 193-199.

(東京都世田谷区)

○ウスキボシハナノミの北海道奥尻島からの記録

次のように、北海道渡島半島沖の奥尻島から採集されたウスキボシハナノミ *Hoshiananomia kurosawai* CHUJŌ et NAKANE の標本があるので報告する。

本種は従来、筆者の知る限り福島県・新潟県以南の本州と屋久島に分布が知られていたもので、奥尻島が新たな分布北限地として位置づけられることになった。

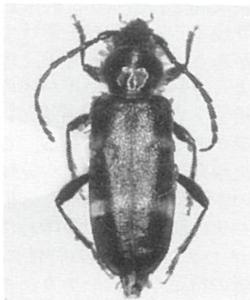
1♂1♀, 奥尻島稲穂, 13.VIII.1985, 楠井善久採集、筆者保管

貴重な標本を恵与されるとともに、その発表を委ねられた楠井善久氏に厚く御礼申し上げる。

(神奈川県立博物館、高桑正敏)

○岐阜県初記録のビャクシンカミキリ

ビャクシンカミキリ *Semanotus bifasciatus* (MOTSCHULSKY) はヒノキ、アスナロ、ヒバなどを加害する林業害虫として知られているが、その割には個体数が少なく、分布も局地的であるようである。日本産カミキリ大図鑑によれば、中部地方では長野県だけに分布していることになっているが、岐阜県でも採集されたので報告しておく。



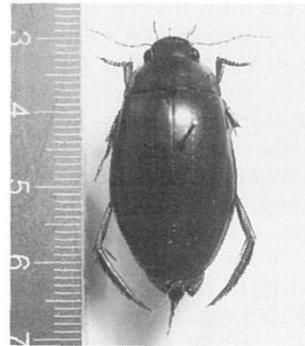
1頭、岐阜県武儀郡板取村川浦, 26.IV.1992.

この地域は標高1100mで、ブナを中心とする広葉樹林である。この中に根上りヒノキと呼ばれる樹齢500年とも1000年とも言われるヒノキの老木が10数本点在しているので、ここから発生したものと思われる。(岐阜県各務原市、野平照雄)

○キタゲンゴロウモドキ雄型の雌の記録

キタゲンゴロウモドキ *Dytiscus delictus* ZAITSEV は稀な種で、山形県内でも採集記録は非常に少な

い。今回筆者は、上翅に条溝をそなえないキタゲンゴロウモドキの雌を採集しているので報告する。



1♀, 山形県西村山郡西川町, 7.VI.1992. 筆者採集。

ゲンゴロウモドキの雌については既に2型があるのを知られているが、本種の、雄型の雌の採集記録はきわめて稀と思われる。

小さな水溜まりで、周囲は木々で覆われた日蔭が多く、水草の根際から採集した。なお同地にはキタゲンゴロウモドキのほかにもゲンゴロウ類が、多く生息していたことを付記しておく。

参考文献

- 佐藤正孝 (1984) 日本産水棲甲虫類の分類学的覚え書き, II. 甲虫ニュース (66).
 佐藤正孝 (1985) 原色日本甲虫図鑑 II, 保育社.

(山形県酒田市、高橋 誠)
 ○静岡市のセグロホソクビゴミムシの記録

静岡市安倍川源流域の大谷崩にて本種を採集しているので報告する。Brachinus 属で本種の採集例はあまり多くないようである。沢沿いの石おこしにより得たものである。発表をすすめられた森田誠司氏に厚くお礼を申しあげる。

1頭、安倍川上流大谷崩, 7.X.1992. 筆者採集。
 (静岡県焼津市、平井克男)

○メダカオオキバハネカクシを京都市で採集

メダカオオキバハネカクシ *Megalopinus japonicus* (NAKANE) は、複眼が非常に大きく、前胸背板側縁に4歯をそなえる特殊な形態をした種である。本種は極めて稀な種と考えられ、近畿地方からは原記



載 (NAKANE, 1957) で用いられた奈良市春日山, 三重県宮川村大杉峡谷桃木で得られた各 1 頭の標本以外, 記録がないようである。筆者は, 本種を京都市で採集しているので報告しておく。

1 頭, 京都市左京区岩倉村松町, 28. VI. 1992.

本種および本属の種は, 菌類の生えた朽木や地衣類におおわれた枯木で採集されるという (NAOMI, 1986)。筆者が本種を発見したのも *Quercus* (おそらくコナラ), の径 20 cm 程度の朽木上であった。この朽木はカワラタケ類が生じ, 多くのゴミムシダマシ科, デオキノコムシ科, ハネカクシ科の甲虫が集まっていた。

なお, 採集場所はコナラの二次林であるが, 所々に照葉樹の大木を残していた。

末筆ながら, 文献の入手と本種に関して御教示いただいた東京農業大学昆虫学研究室の岸本年郎氏, 写真を撮影していただいた大阪市住吉区の大築正弘氏に厚く御礼申し上げる。

参考文献

T. NAKANE, 1957, Eine neue Art der Gattung *Megalopsida* aus Japan. *Ins. matsum.*, 21: 53-55.

S-I. NAOMI, 1986, A Taxonomic Study on the Subfamily *Megalopininae* (Coleoptera, Oxydoridae) of Japan, with Descriptions of Two New Species. *Kontyū*, 54 (2): 344-352.

(大阪市阿倍野区, 山崎一男)

○山形県鳥海山におけるゴミムシ 2 種の記録

山形県鳥海山のゴミムシ類については, 1972 年, 1982 年の山形県総合学術調査報告で詳しく報告されている。筆者は, 県内初記録と思われるゴミムシ 2 種を山形県鳥海山より採集したので報告する。

1. ハコネモリヒラタゴミムシ *Colpodes hakonus* HAROLD

1♀, 鳥海山, 山形県飽海郡八幡町, 7. VII. 1992.

2. ニッコウホソヒラタゴミムシ *Trepthonus nikkoensis* BATES

1♀, 7. VII. 1992; 1♂, 12. VII. 1992; 1♂, 1-3. VIII. 1992. 鳥海山, 山形県飽海郡八幡町。

標高約 1000 m のところで, 2 種共に, 道路脇の石おこしや, 側溝の中に堆積した枯葉の下から採集した。

末筆ながら, 本種の同定を頂いた和泉敦夫氏に厚くお礼申し上げる。

参考文献

白畑孝太郎, 黒沢良彦, 1972. 鳥海山・飛島の昆虫類. 鳥海山・飛島総合学術調査報告, pp. 218-262. 山形県総合学術調査会.

白畑孝太郎, 黒沢良彦, 菊地賢治, 1982. 山形県産昆虫目録. 最上川学術調査報告, pp. 463-553. 山形県総合学術調査会.

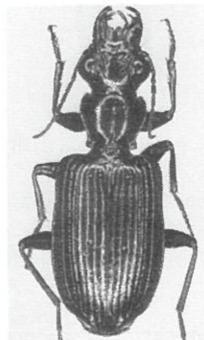
田中和夫, 1985. オサムシ科 (ナガゴミムシ亜科) 上野俊一・黒沢良彦・佐藤正孝編著, 原色日本甲虫図鑑 (II), 保育社, 大阪.

桜井俊一, 1990. 山形県の甲虫類 (X). 山形県昆虫同好会会誌, (19) 11-17.

(山形県酒田市, 高橋 誠)

○キンヘリアトバゴミムシ. 屋久島に産す

キンヘリアトバゴミムシ *Catascopus ignicinctus* BATES が屋久島で採集されているので報告する.



1 頭, 鹿児島県熊毛郡上屋久町半山, 15. VII. 1992, 田中勇採集.

ブラックライトに来たとのことである。本種の产地として, 『原色日本甲虫図鑑 II』(1985) には, 九州; 東南アジアとなっている。

(兵庫県西宮市, 田中 稔)

○ナガケシゲンゴロウを秋田県で採集

ナガケシゲンゴロウ *Hydroporus uenoi* NAKANE はまれな種で, 中部地方中央部からの記録が知られているが, 筆者は秋田県より採集しているので記録したい。秋田県からは初記録と思われる。

14 頭, 秋田県象潟町石名坂, 28. III. 1993, 筆者採集; 18 頭, 秋田県象潟町石名坂, 4. IV. 1993. 筆者採集; 23 頭, 秋田県象潟町石名坂, 16. V. 1993, 筆者採集。

湧水のある浅い池で, 池一面カヤがありその根際から採集した。

末筆ながら, ご多忙中にもかかわらず本種の同定ご教示を頂いた佐藤正孝博士に厚くお礼申し上げる。

参考文献

佐藤正孝, 1985. 上野俊一, 黒沢良彦, 佐藤正孝 (編著) 原色日本甲虫図鑑 (II): 183-201.

(山形県酒田市, 高橋 誠)

○ムネトゲセスジハネカクシ房総からの記録

ムネトゲセスジハネカクシ *Oxytelopsis shibatai* Ito, 1987 は奈良県大和上市芋山の 26♂♂27♀♀をタイプとして記載されたが、その後の記録はないと思われる。

筆者は千葉県富山の照葉樹林中の朽木についている本種を1個体採集した。また、その周辺の落葉を持ち帰りツルグレン装置で抽出したところ、多数の本種が得られたので報告する。



105♂♂71♀♀、千葉県富山町富山、30.VI.1991、筆者採集。

なお、*Oxytelopsis* 属は東洋区に広く分布するが日本産は本種のみが知られており、*Oxytelus* 属や*Anotylus* 属とは前頭部に環状の凹陥を有することで区別できる。

(東京農大、岸本年郎)

○北海道未記録のゴミムシ2種を採集

筆者は従来北海道に記録のなかったと思われる次の2種を、渡島半島で採集しているので報告する。

なお、同定及び発表を勧めていただいた、旭川在住の松本英明氏に厚くお礼申し上げる。

ヒョウゴマルガタゴミムシ *Amara hiogoensis* (BATES) (写真1)

1頭、檜山支庁熊石町折戸、23.IX.1990。

国道脇の側溝内で得られたもので、他にはキボシアオゴミムシ、エゾクロナガオサムシがわずかにいたのみである。



写真1



写真2

メダカアトキリゴミムシ *Orionella lewisii* (BATES) (写真2)

1頭、檜山支庁乙部町姫川、23.IX.1990。

林道脇の疎枝をビーキングして得た。

(埼玉県北葛飾郡、荒川 哲)

○カミキリムシ3種の食性について

カミキリムシ2種の成虫の後食と、1種のhostについて興味深い見知りが得られたので以下に報告する。

1. ブチヒゲハナカミキリ *Stictoleptura variicornis* (DALMAN)

1992年8月20日頃に北海道知床半島羅臼岳の登山道付近で、ミズナラの高さ約5mのところから出ている樹液を摂食中の成虫を1頭観察した。ノリウツギなどの花に訪花する性質は、良く知られているが樹液に訪れた例は、未知と思われる。

2. マヤサンコブヤハズカミキリ *Mesechthistatus furciferus* (BATES)

1993年6月11、14日の石川郡鶴来町のスギ林内で、シイタケを後食中の♀成虫をそれぞれ1頭ずつ採集した。本種の飼育でのキノコ類の後食は、すでに報告されているが、野外観察例は未知と思われる。このシイタケは、廃床を林内に放置していたものから出たものである。



シイタケを後食中のマヤサンコブヤハズカミキリ♀。

3. クロオビトゲムネカミキリ *Sciades fasciatus* (MATSUSHITA)

1990年4月上旬ごろに石垣島で採集したカクレミノの付き枯れ枝(直径約5cm)より、同年5月9日、6月21日に成虫がそれぞれ1頭ずつ羽化脱出した。本種のhostとしては未知と思われる。

参考文献

清沢晴親、早川広文、降旗剛寛、堀 勝彦、小林靖彦編、1981、長野県のカミキリムシ、東京法令出版株式会社。

小島圭三、中村慎吾、1986、日本産カミキリムシ食樹総目録、比婆科学教育振興会。

大林延夫、佐藤正孝、小島圭三編、1992、日本産カミキリムシ検索図説、東海大学出版会。

(石川県林業試験場、江崎功二郎)

茨城県で発見された西日本分布型カミキリムシ3種他

沼田 稔・進藤 琢也・進藤 健朗

従来静岡県、山梨県以東からは未記録のカミキリムシ3種を、茨城県久慈郡水府村武生林道で採集しているので報告する。

1. ペーツヤサカミキリ *Leptoxenus ibidiiformis* BATES (写真a)

2頭, 4.VI.1993, 進藤琢也採集: 1頭, 5.VI.1993, 進藤琢也採集: 1頭, 6.VI.1993, 進藤琢也採集: 1頭, 6.VI.1993, 渡辺英行採集: 1頭, 6.VI.1993, 進藤琢也採集: 2頭, 27.VI.1993, 進藤琢也採集: 8頭, 27.VI.1993, 進藤健朗採集: 1頭, 4.VII.1993, 沼田稔採集: 2頭, 11.VII.1993, 善場莊八採集。

コゴメウツギ、ヤマボウシ、クリなどの花及び林縁のスヴィーピングによって採集した。

2. キイロメダカカミキリ *Stenhomalus nagaoi* HAYASHI (写真b)

3♂♂2♀♀, 9.VI.1993, 進藤健朗採集 (7~19.VII.1993 羽化脱出): 5頭, 11.VIII.1993, 沼田稔材採集 (2~10.VIII.1993 羽化脱出)。

いずれもダンコウバイ (クスノキ科) の細い枯れ枝から羽化脱出した。

3. スネケブカヒロコバネカミキリ *Merionoedea (Macromolorchus) hirsuta* (MITONO et NISHIMURA) (写真c)

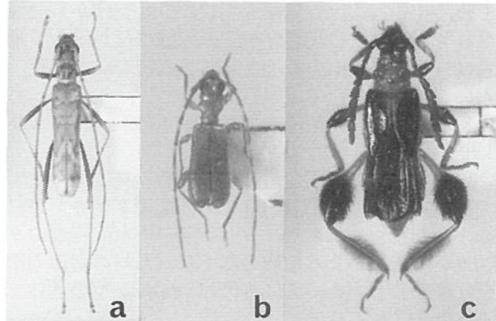
1♀, 22.VIII.1993, 沼田稔採集: 3♂♂, 24.VIII.1993, 坂口春典採集: 3♂♂, 28.VIII.1993, 沼田稔採集: 3♂♂1♀, 28.VIII.1993, 渡辺健採集: 1♀, 6.IX.1993, 久保田正秀採集。

カラスザンショウやヌルデなどの花上、その付近を飛翔中のものを採集した。

本種には弱い地域変異が知られているが、今回採集された茨城県産の個体を西日本などの他産地のものと比較検討したところ、基本的な形質は区別することはできないが、雄の体色は赤色化の傾向が強く、とくに前胸背板基部は広く赤褐色を帯び、全体が黒色の他産地のそれとは異なり、中胸腹板も中央部を除いて常に赤褐色であった。なお、この特徴は比較に用いた静岡県の雄個体と共通である（検視標本: 1♂, 静岡県榛原郡本川根町長島（標高500m), 30.VII.1981, 市川恭治採集）。また、体長は11.2mm-12.2mm(雄), 13.1-13.2mm(雌)で、やや小さいが、他産地と有意な差は認められなかった。

これら3種の太平洋側の東限記録は静岡県^{1,3,4,5)}(スネケブカヒロコバネカミキリは山梨県の記録がある²⁾)で、これよりかなり東側に離れた茨城県で採集されたのは分布上興味深いことと思われる。

採集地は久慈山地の標高400~500m、尾根を通る林道で、アカマツ、モミを交えたクヌギ、コナラを主とする落葉広葉樹の二次林と、スギ、ヒノキの植林からなり、所々にシラカシ、アカガシなどの常



緑広葉樹が見られ、暖帯林の北限にあたる地である。

また、この他に茨城県未記録のカミキリムシ4種を同地で記録しているので、あわせて報告する。

- カタキハナカミキリ *Pedostrangalia femoralis* (MOTSCHULSKY)

2頭, 27.VI.1993, 進藤健朗採集: 1頭, 16.VII.1993, 進藤琢也採集。

ヤマボウシ、クマノミズキの花のスヴィーピングで採集した。

- トウキョウトラカミキリ *Chlorophorus yedoensis* (KANO)

1頭, 5.VI.1993, 進藤琢也採集。

コナラ伐採木で採集。

- マダラゴマフカミキリ *Mesosa poecila* BATES

1♂1♀, 27.VI.1993, 進藤健朗採集。

アカシデ立枯れで採集。

- トラフホソバネカミキリ *Thranius variegatus variegatus* BATES

1♂, 17.VII.1993, 沼田稔採集。

林縁のビーティングで採集。

これらよって、茨城県で記録されたカミキリムシは219種となった。

最後になったが、報告にあたってスネケブカヒロコバネカミキリについてご教示いただいた新里達也氏、お世話をなった大桃定洋氏、久保田正秀氏、秋山黄洋氏に厚くお礼申し上げる。

参考文献

- 1) 木下富夫(1988), キイロメダカカミキリ伊豆半島に産す. 月刊むし(214): 2.
- 2) 池田清彦(1980), 山梨県でスネケブカヒロコバネカミキリを採集. 月刊むし(118): 29.
- 3) 市川恭治(1980), 静岡市周辺で採集した珍しいカミキリ4種. 月刊むし(118): 33.
- 4) 草間慶一他(1984), 日本産カミキリ大図鑑: 251, 272, 291.
- 5) 大林延夫他(1992), 日本産カミキリムシ検索図説: 471, 482, 489.

(沼田, 茨城県水戸市; 進藤, 埼玉県草加市)

○ホソコバネカミキリを日高町で採集

ホソコバネカミキリ *Necydalis pennata* LEWIS は北海道に産するホソコバネカミキリ属の中でもっとも分布が広い種で、これまでに石狩、空知、上川、十勝、根室、網走¹⁾、留萌²⁾、宗谷³⁾の8支庁から記録されているが、日高支庁からの記録はなかった。筆者は日高山脈登山の基地として日高町を訪れた際、本種を採集したので記録しておきたい。

1♂1♀、 北海道沙流郡日高町本町、 22. VII. 1993, 芳賀馨採集・保管。

いずれも市街の南端付近にあるチップ工場の土場で採集した。♂は直径 20 cm 程度のダケカンバ材の下面に止まっており、♀は直径 60 cm 程度のダケカンバと思われる樹皮のなくなった材の切口の割目に産卵していた。共に茶色の *pennata* 型の個体であった。

この土場は1992年にも訪れており、筆者の友人も何度か採集を試みているが、太いカンバ材が大量に集積されており近くの山の樹相も良いにもかかわらずそれまでに採集された甲虫は質量ともに貧弱で、北海道の土場の典型的なもの一つであった。

文 献

- 1) 森正人他 (1986) 北海道産カミキリムシの分布(1), ちくばききり, 1: 1-51.
- 2) 野上和顕 (1986) 留萌管内ホソコバネカミキリを採集, ちくばききり, 1: 90.
- 3) 芳賀 馨 (1989) 宗谷支庁・天北線沿線で採集した甲虫について, *jezoensis*, 16: 103-121.

(神奈川県川崎市, 芳賀 馨)

○訂正とおわび

本誌99号(1992, IX)の2頁で筆者は、チビコメツキモドキを「北海道初記録の可能性が高い」として糠平から記録したが、平野幸彦氏から、既に礼文島(平野, 1989, 月刊むし(224): 41)から記録されている旨ご指摘をいただいた。ここに私の不明を深くおわびして前報を訂正すると共に、平野氏のご厚情に深くお礼を申し上げる。

(神奈川県川崎市, 芳賀 馨)

◇例会報告◇

1993年第3回例会を9月26日(日), 午後1時30分より, 上野の国立科学博物館2号館4階, 実験講義室にて行ないました。講演は, 松本浩一氏・

昆虫学研究器具は「志賀昆虫」へ

日本ではじめて出来たステンレス製有頭昆虫針00, 0, 1, 2, 3, 4, 5, 6号, 有頭ダブル針も出来ました。その他, 採集, 製作器具一切豊富に取り揃えております。

〒150 東京都渋谷区渋谷1丁目 7-6

振替 東京(3) 21129

電話 (03) 3409-6401 (ムシは一番)

FAX (03) 3409-6160

(カタログ贈呈) (株)志賀昆虫普及社

苅部治紀氏による「北ベトナムの昆虫—93年5~6月の採集成果を中心に」と、高橋和弘氏による「神奈川県のジョウカイについて」の2題。

少憩の後は恒例の一人一話で、今シーズンの成果などを中心にたくさんの話題が披露されました。参加者は35名で、いつにもまして盛会でした。講演された松本, 苅部, 高橋の各氏にお礼申し上げます。

(例会担当, 久保田正秀)

◇会員動静◇

○新入会

相田和博(松山市・愛媛大昆虫研), 平井剛夫(那須郡西那須野町・草地試験場), 生田稔彦(藤岡市), 伊沢和義(多治見市), 初宿成彦(大阪市東住吉区・大阪市立自然史博) (庶務担当, 岩田隆太郎)

◇日本鞘翅学会(1993年)◇

《入会問合せ・住所変更連絡先・退会届》
Elytra 投稿先 〒169 東京都新宿区百人町 3-23-1. 国立科学博物館分館 動物研究部昆虫第一研究室気付, 日本鞘翅学会宛 (tel. 03-3364-2311, 内線 621)

《甲虫ニュース投稿先》〒278 千葉県野田市堤台438-32, 久保田正秀宛(1994年3月まで)

《会費振込先》東京 8-401793 (新入会費 ¥1,000; 一般会員年会費 ¥5,000; 国外会員年会費 ¥8,000; 賛助会員年会費 ¥10,000 以上)

《鞘翅学会・鞘翅目学会・甲虫談話会の刊行物バックナンバー取扱》〒973 いわき市内郷郵便局私書箱11号, TTS 昆虫図書宛 (tel. 0246-27-2521/fax. 0246-27-4031)

《その他問い合わせ先》(変更注意) 〒252 神奈川県藤沢市亀井野 1866, 日本大学農獣医学部林学科, 岩田隆太郎宛 (tel. 0466-81-6241, 内線 2140)

日本鞘翅学会

会費(一カ年) 5,000 円, 次号は1994年3月下旬発行予定

発行人 渡辺泰明

発行所 日本鞘翅学会 東京都新宿区百人町 3-23-1 国立科学博物館昆虫第1研究室

電話 (3364) 2311, 振替 東京 8-401793

印刷所 (株)国際文献印刷社

タツミの昆虫採集器具

ドイツ型標本箱 木製大 ¥7,000, 桐合板製インロー型標本箱大 ¥2,500, 送料一箱につき都内及第一地帯: 4個以下 ¥1,600, 5個以上 ¥1,000(以下同様), 第2地帯 ¥1,800, ¥1,100, 第3地帯 ¥2,000, ¥1,250, 其他, 各種器具, 針などを製作販売。カタログを御請求下さい。(¥62)

タツミ製作所

〒113 東京都文京区湯島 2-21-25

電話 (03) 3811-4547, 振替 6-113479